

国際社会における日本人

—東南アジア・アフリカをまわって—

鳥羽 欽一郎

染谷学部長からたいへん鄭重なご紹介をいただき、恐縮しております。私は別に染谷先生がご紹介下さったような国際人ではございません。普通の日本人でございます。あるいは外国に行くたびに、より日本人になって帰ってくる日本人かもしれません。

きょう私に与えられました題目は、「国際社会における日本人」ということでございます。率直に申しますと、今日「日本人問題」あるいは「日本人論」といったものが非常に盛んでございます。最近考えますことは、日本人が日本人論をしなくなったときに、日本人は本当の意味で国際人になるのではないか、という気がするのです。しかしそう言ってしまうと、今日話すことが何もなくなってしまふわけです。ですから、副題にありますように、最近東南アジアとアフリカを廻ってまいりましたので、それを中心に、若干最近気がついておりますことをお話しして、時間のせめをふさがせていただければと思います。

実は、ことしになって2度私は海外に出ておりまして、2月に18日ほどヨーロッパを廻りました。これは私の専門のほうの仕事で、久しぶりでヨーロッパを歩いてきました。それから3月の14日から4月21日まで、40日ほどでしたが、これは政府の委嘱で、日本の経済協力のあり方を考えるために、ディベロッピング・カントリーといいますが、途上国のできるだけ奥地へ入り込む努力をしながら、主としていなかを歩いてきました。

行きました主なところは、一番遠いところでアフリカのケニアでございました。それからあとは、ほとんどが私が最近よく行っております東南アジアで、

フィリピンには10日ほどおりました。それから通過国としてはインドとか、あるいはタイにも2、3回立ち寄りしましたが、長かったのは、ラオスに半月おりました。ラオスではちょうど連合政権が成立いたしまして、パテト・ラオが入っており、日本の新聞記者も、30人ほどカメラをかついで集まっておりました。そんなこともありまして、予定を1週間ほど延ばして、ラオスに滞在いたしました。ラオスはビエンチャンだけではなく、王都のルアンプラバン、それから南部のサバナケットまで足を伸ばしました。それからあとサイゴンにちょっと滞在して、帰ってきたわけです。ですから今回の旅行は、途上国のなるべく奥地を歩いたわけです。そしてこれは私にとっては、ある意味で非常に異常な体験でございました。

と申しますのは、たとえば飛行機でアメリカから帰ってまいりますと、あるいはヨーロッパからモスクワ経由で帰ってまいりますと、羽田へ着きましても、羽田がそれほど立派にはみえませんし、高速道路も狭いなあと感じます。自宅のそばへ自動車で帰ってきますと、横丁は狭くてごちゃごちゃしている。自分の家も実に狭い。こんなところへよくまあ住んでいたものだと思うわけです。ところが、今度は非常に違いました。羽田空港があれだけ立派に見えたことはございません。高速道路があれほどきれいで整然として見えたことも、高層建築があんなに立派にみえたこともございません。それから自分の家がこんなに清潔で、衛生的で、立派だと思ったのも生まれて初めてでございます。ですから人間の感覚というものは、すべて比較的なものです。ですからこの体験は、私が今度のアフリカ、東南アジアではだで感じてきたことがどんなものであったかということを、ある意味では示しているともいえましょう。

さて、本題である「国際社会での日本人」という問題にそろそろ入らなければいけないのですが、国際社会といたしましても、これはいろいろ広うございます。西欧、アメリカ、カナダ、あるいはオーストラリアといった先進国もありますし、あるいは私が最近歩いてきましたような途上国もございます。途上国

といっても、実はこれは非常にさまざまであります。今週中にはあるいは出るかもしれません、毎日新聞の学芸欄に「メコンの東で」という題で一文を書きました。どういことを書いたかと申しますと、たとえば私はこれまで、タイに10回ぐらい行っております。汽車に乗ってかなり奥地まで入ったこともございます。けれども、私はタイを先進国だと思ったことはこれまでございませんでした。けれども今度私はバンコクからまっすぐに、ラオスの首都ビエンチャンに入りました。このビエンチャンという町は、タイとの国境のメコン川に沿っている町であり、そのメコンを越せば東北タイでございます。タイ側にはノンカイという町があり、それから2時間ほど自動車で行くと、例の米軍の空軍基地のあるウドンがございます。ところで、このビエンチャンに着いてながめたタイは、これまた私にとって異常な経験であったのですが、ラオスに較べてたいへんな先進国であったのです。

たとえば飛行機からながめた畑のうねのつくり方、耕地整理のしかたが違います。ビエンチャンはラオスで最大の都市です。けれども、ビエンチャンの対岸にあるノンカイという町は、タイではおそらく10番目ぐらいの町ではないかと思えます。しかしその活気が違います。そしてメコンを渡って、タイの物資はどしどしラオスに入ってきております。たとえば卵1つを例にとっても、ラオスではタイから入ってくる卵に、価格の上で競争できません。あらゆる物資が流入し、しかも安い価格で流れこんでいるのです。それから、ラオスにおける最高の教育機関は、フランス流のリセー(高等中学校)でございます。そこを出た優秀な人たちはフランスへ勉強に行きますが、その次の人たちはタイに留学いたします。私はラオス側、つまりメコン川の東に立って、同じ途上国の中で、先進性と後進性との違いをこれほどはっきりと見たことはありませんでした。

日本人は、国際人と申しますと、まず皆さんの念頭に浮かぶのは、西欧社会を前提とした人間のパターンだと思います。そのためにこそ、われわれは明治から100年、一生懸命西欧化の努力を続けてきました。

また中学以来われわれは英語を勉強してきました。われわれの生活様式、あるいは衣服の問題、あるいは食事の問題に至るまで、この100年の努力はおそらく西欧化の歴史であったと思います。そしてわれわれが国際化というときにまず念頭に浮かぶのは、そういう西欧の中でわれわれがどうビヘーブできるか、どう立派にやれるか、能力的にどうしたら対等にできるか、どうやってコンピュータできるのかといった問題であったと思います。決してこれが悪かったという訳ではありませんが、今日になって考えますと、国際化のもう一つの側面を日本人は忘れてきたのではないかと考えるのです。

その国際化とは、途上国における日本人の問題です。確かに今日、途上国には大ぜいの日本人たちが出かけています。学生諸君もよく船上大学であるとか、あるいはグッド・ウイル・ミッションといったような形で出かけます。私も向こうに住んでいて、そういう方々を迎えたことが何回かございます。しかし、その人たちがこられるところというのはまずまずが大都会です。タイでいえばバンコクでしょうし、インドネシアでいえばジャカルタであり、少し足をのばしてもバンドンだと思います。マレーシアであればクアラルンプールでしょうし、少し足をのばしてもピナンかマラッカでしょう。あるいはまたシンガポールであり、香港であるわけです。そしてわれわれの中には、こうした大都会をみてもその遅れた面にびっくりして帰る人もいるだろうと思います。

けれども、もったきびしい途上国の現実をとり上げますと、たとえばバンコクは350万の人口があります。むんむんするような町です。けれどもバンコクに次ぐタイの第2の都市は、例のチェンマイです。チェンマイの人口は僅か20万ほどです。350万から20万に落ちるのです。つまりわれわれが途上国をたずねて訪れる町というのは、その国の状態を正當に反映したものではございません。しかしその20万のチェンマイですら、たとえば東北タイのいなかから行けばすばらしい大都会なのです。私は文化人類学者の本をよく読みますが、その中にこんな話があります。カレン族の少女が——少女といっても20歳前後でし

ようか——山から生まれて初めてチェンマイにおりたときに、たいへんなカルチュア・ショックを起こして、ものも言わなくなって、翌日にはすぐ山に帰ってしまったということです。このことは、20万の人口のチェンマイですら、これまた大都会だということです。そしてもしわれわれが大都会を離れていなかに入ると——カレン族は山に住む山岳民族ですから若干違うかもしれませんが——50年か100年前と同じような状態が今日でもまだ続いているのです。こうした田舎は、われわれの考える田舎とは概念が違います。私たちが1つの標準で考える社会とは違った社会が、そこには存在いたします。

ですから東南アジアへ行き、たとえばバンコクをみた、ジャカルタをみた、シンガポールをみたとしても、おそらくほんとうの東南アジアをみたことにはならないだろうと思います。また私のように若干奥地に入ったところで、わずか10日や半月住んでも、住むところは大体ホテルでございませすし、民家に泊まったこともございませすが、それはかなり大きな民家で、大きな村でなければ泊まれる状態ではございませせん。それで一体何が判るのか、これを今度の旅行では非常に痛感したわけです。

ところが非常におもしろいことに、皆さんがそうかどうか私にはわかりませせんけれども、日本人の感覚の中には、西欧は未知の国である、けれども東南アジアは非常に親しくて、何となくわかっている国であるという考え方がないでしようか。こうした感覚を日本人がもつのは、一つには人種の問題があると思ひます。つまり背の高さは同じである、皮膚の色も同じである、髪の色も同じである。ある場合には日本人でもフィリピンの人によく似た人もいるかもしれませせん。私の友人には、ベトナム人よりもベトナム人らしい日本人もおります。これが1つあるかもしれませせん。もう1つは食事の問題だと思ひます。これは同じ米作農民であつて、水田耕作をやること、それから米を食べること、こうした点をわれわれはたとえばナイフ、フォークの使い方をうるさくいい、テーブル・マナーを知らなければ恐しいといった西欧とは違った感覚で、受けとめ

ているのだと思います。

さらには宗教の問題もあるでしょう。小乗仏教であれ、仏教寺院は、われわれにカソリックの大きなカテドラルよりもはるかに親近感を与えるだろうと思います。つまり日本人は、行ったこともないにもかかわらず、あるいは経験したこともないにもかかわらず、おそらく西欧社会よりも東南アジアの社会を身近なものとして錯覚しているような気がするのです。そしてまた、非常に困ったことには、そういう考え方が基礎にまずあるために、東南アジアの国々をそれ以上に自分から進んで理解してみようという気も起こさないことです。そこでとまってしまうのです。

日本人の場合、こうした問題はどこにその原因があるのかということ、私はいろいろ考えてみたことがあります。それを書いたこともございますが、1つは明治から今日までの、100年を越すその歴史の中にあるような気がいたします。明治から100年というもの、日本人の努力は、一つにかかって西欧化という目標を達成することに向けられてきました。その西欧化は、中でもテクノロジーが中心に置かれたように思います。テクノロジーは単なる機械技術だけではございません。商学部の皆さんでいえば、マネージメントの技術、マーケティングの技術までを入れてもかまいませんが、いずれにしても、この100年の間西欧のテクノロジーを追求してきたのが日本人であったと思うのです。ですから日本人の中に、若い人でもまだあると私は思いますが——私なんかははっきりございますが——、ある種の西欧に対するインフェリオリティ・コンプレックスがあります。そしてわれわれの勉強の目標も、留学の目標も、すべては西欧化をいかにして達成するかという至上命令で貫かれてきたようです。

これは逆に言うと、われわれが学ぶべき異質の社会というのは西欧であって、それ以外の社会はほとんど学ぶに足らない、あるいはその必要もないという感覚に、おそらく通ずるだろうと思います。これは現に事実でございまして、学者で西欧の大学に留学する人、あるいは学生で西欧の大学に留学する人は非常

に多い。私自身もそうでした。けれども、東南アジアの大学で勉強しようとする人は、ほとんどいないでしょう。あるいは、西欧の語学は何か勉強しようとするけれども、東南アジア語、あるいはアフリカのスワヒリ語をやるという人は、ほとんどいないでしょう。

私はことしの後半から、韓国の高麗大学へ早稲田大学からの交換で、客員教授として参ります。それでそろそろ韓国語を始めるわけですが、韓国語のしゃべれる早稲田の学生は、留学生を除いては殆んどいないだろうと思います。つまり日本人の価値判断は、西欧を規準として行われるのです。私は日本人のこうした態度が全部悪かったとは申しません。しかし、いかに西欧に追いつくかということに専心したために、それ以外のものは不要と考えた。またそうでもしなければ、追いつけなかったかもしれません。しかしわれわれが東南アジアへ行きました時に出てくる感覚は、知らず知らずのうちに優越感になると思います。そしてその優越感こそが、東南アジアのカルチュアであれ、あらゆる社会のシステムであれ、あるいは言語であれ、そういうものを劣ったもの unnecessary なものと考えさせる原因だろうと思います。

外にも色々と例をあげることができると思いますが、明治100年という日本の歴史の上で、今申しましたようなコンテキストの中で考えますと、日本人の基本的な意識の中には——若い世代の方はどんどん変わってきているとは思いますが——このような考え方がいまだに根強く残っているだろうと思うのです。私が東南アジアについて本を書こうと思いました理由は、非常につまらない週刊誌的な記事はちまたにあふれているにもかかわらず、まじめな本が非常に少なかったからです。これはわれわれの関心の低さ以外の何ものでもないと思ったからです。

それから、もう1つここで私が重要だと思えることは、日本人はある意味で島国で育った、閉鎖社会で育ったといわれていますが、これもまた事実でしょう。したがって、日本人の考える考え方は、非常にものさしがぎまってくる

のです。そしてそのものさしは、今日ではかなり西欧と近いものになってきました。これは私言にくいことですが、たとえば東南アジアでいろんな人たちと議論をする。そうした場合皮膚感覚の上では非常に親しい感じをもちながら、あるプランニングならプランニングを論ずるといったときに、相互にアンダスタンディングに達することがなかなか困難でした。そうした時に非常に早くアンダスタンディングできるのは、同じ東南アジア人の中でも西欧で勉強した人たちであり、もっと簡単にアンダスタンディングできるのは、何と西欧人だったのです。

今度もフィリピンで、フィリピンの問題を考えるときに、私はフィリピンにいるオランダ人なり、カナダ人なり、アメリカ人の、たとえばエコノミック・アドバイザーとか、学者の人たちともインタビューしました。彼らの見方を知らうとしたわけです。その議論のプロセスをいまになって考えてみますと、2時間もあればほとんど相互に意思疎通ができるのは西欧人でした。しかし現地の人たち、特に余り教育のない人々の場合には、不可能とっていいくらいたいへんでした。相互の理解のものさしが違うのです。中でどうやら相互理解ができたのは、知的なエリートたち、あるいはアカデミックな社会に住んでいる人たちは、比較的早かった。けれども一般のものさしは、われわれと非常に違うということを感じたのです。

もちろん日本人だけがものさしを1つしかもたないのではなくて、西欧人もそうかもしれません。特にアメリカ人の場合は、同じように大陸に住み、ある種の優越感を持っているために、彼らのものさしもまた非常に限定されているように思われますが、このアメリカ人に比べても、私は日本人のものさしというのは、非常に限られた狭いもののように思うのです。そしてそのものさしで東南アジアの社会をはかつて、これはホープレスである、これは話にならん、これはだめだといっているところに、西欧では何とか通用する国際人が生まれたとしても、東南アジアで通用する国際人は生まれないように思えるのです。これを正してゆくには、われわれの価値尺度をフレキシブルにすること以外に

現段階では方法はないでしょう。あるいはわれわれの価値判断にそれぞれ修正を加えて、それぞれの国で使用できるものとしなければならぬと思います。

私はこのあたりに1つの基本的な問題があると考えてのですが、こういう問題を、今度は別の面から考えてみましょう。たとえば田中首相が東南アジアへ行きまして、ご承知のとおりのはげしい抵抗にあいました。けれどもそれならば日本だけが悪くて、向こうには問題がないのかということも考えてみなければなりません。こうした問題では、たとえばバンコクで、タイ人の新聞記者とかなり論争をして、やり合ったことがございます。そのプロセスの中でだんだんと判ってきたことなのですが、非常におもしろい問題があるのです。これまで私が皆さんに申し上げてきたことは、日本人は西欧を追っかけてきたために、現地を見る目を失ったということでした。これを別の言葉でいうと、「西欧」という窓を通してしかものを見なくなったといってもいいかもしれません。つまり「西欧の窓」を通して現地を見るわけです。この目でみますと、東南アジアはおくられている。われわれは彼らよりもはるかに西欧に追いついている。これが優越感になるのだらうと思います。

けれども同時にまた、おもしろいことを発見するのです。タイなり、マレーシアなり、インドネシアなり、ラオスでもいいかもしれません。日本に対する批判が出てくるのは、それぞれの国のインテリゲンチヤルの中からなのです。そしてこのインテリゲンチヤルと話をしているのは、彼らもまた西欧を追いかけられているのです。そして彼らもまた「西欧の窓」を通して日本人を見ているということです。つまりわれわれはどうも、お互いにアジア人としてダイレクトに見つめあったことがなかったように思われます。

ですから、日本人が東南アジアに入って、優越感を抱く。なぜ抱くのかというと、日本人は言語でも交際能力でも余り上手ではありませんから、インテリゲンチヤルとつき合うことをせずどちらかということと社会層の低いところで接触をすることが多いのです。そしてそういう人々との接触の中で受けたインプレ

ッションを基礎にして判断を下します。これはおこなっている、これはだめだ、われわれがすぐれている……というわけです。私の経験の範囲でも、日本人が東南アジアに入って、向こうのインテレクチュアルと接触するということはあまりありません。ほとんどないといったほうがよいかもしれません。しかし、向こうのインテレクチュアルからみると、そういう感覚で入ってきて、そこで安心して優越感をもっている日本人が、彼らの「西欧の窓」を通してみると、非常に低劣に見えるのです。日本人と東南アジア人との間の非常に不幸な現実には、インテレクチュアル同士の交流がないばかりではなく両方のインテレクチュアルがともに西欧という「窓」を通しながらながめあって、それぞれに批判している。あるいはそれぞれに間違っただけのインプレッションを懐きあっているということだと思えます。私はこうした文化接触という面から、もう少し東南アジアと日本という問題を考えてみたいと思えます。

たとえば古代から——古代からというが大げさで、私はヒストリアンではありませんが、この地域の勉強をしたことはほとんどございませんけれども——古代から今日までの東南アジアという地域を考えてみますと、今日と同じようにこれまでに、東南アジア同士がお互いに正しくみつめあったことはなかったと思うのです。つまりこういうことです。古代において、たとえば韓国、日本あるいはベトナムという地域をとりますと、これはすべて中国文化圏の辺境だったと思えます。日本の場合でいえば、文明社会の目でみれば、4、5世紀までは野蛮国だったと思えます。あるいは当時の日本人は入れ墨をしていたかもしれません。いずれにしてもそこに強大な中国という文明が起こって、その圧力がこの周辺地帯に及んできたときに、日本人はびっくりして、あわてて国家形成を始めます。韓国も同じ状態です。同時にベトナムも全く同じです。つまりこの地域は、強大な中国文明という光の中で建国し、文化形成を行ってきました。

ところが、ベトナムから西、つまり今日のカンボジア、ラオス、それからタイ、ビルマ、この地域はインド文明の光の中で、新しい時代を古代社会に迎え

たわけです。つまり国家形成なり民族形成というものを、インド文明のプレッシャーなり、あるいは文明の光の中で、始めたわけです。それから地域的にもっと南に下がりますと、たとえば私がしばらくおりましたマレーシア、あるいはインドネシアは、11、12世紀まではインド文明の影響の下にありました。それから今度は、何と世界におけるもう1つの大宗教であるイスラムが入ってまいります。イスラムの伝播というのは非常におもしろい問題で、私もケニアの沿海地方で幾つかの町をたずねて、遺跡をみたりしましたが、この12、13世紀の貿易ルートというのは非常におもしろいのですが、この貿易路にのって入ってきて、この地域はあっという間にイスラム化したしました。皆さんがご存じのボルブドゥール、プランパナンなど中部ジャワの遺跡は、イスラム化以前の仏教遺跡です。ただ一つ今日までイスラム化しなかったのがバリ島です。バリ島には今日でもまだ仏教が残っております。

私が今このような説明をしたのは、こういうことなのです。つまり東南アジアは地域的に相互に親近性を持ち、気候的にも、あるいは水田耕作その他でも非常に親近性があるにもかかわらず、今日までの文化受容のプロセスで、同じ文化の窓を通して相互にみあったことがなかったということなのです。しかも近世以後は西欧文明が入り込んできたためにもっと複雑になりました。この地域はご承知のように、タイを除いて植民地化されております。それも宗主国を異にした西欧が、強大な軍事上の圧力として、あるいは文化として入ってきました。ある国はフランスであり、ある国はオランダであり、ある国はイギリスであるわけです。またスペイン、アメリカが入ったのはフィリピンです。

つまり非常に不幸なことは、東南アジア同士がお互いにダイレクトにみつめあったという時代がこれまでに殆んどないということなのです。そして近代においては、日本がそのよい例でございますが、文化的後進性を克服し西欧に近づこうという努力が、明治からの100年だったわけです。そして東南アジアの国々も、同じようなナショナリズムの中で、独立を主張して西欧から離れよう

としながらも、新しい国家形成のための近代化ないし工業化のモデルは、やはり西欧に求めなければならないという矛盾を持っているわけです。したがって東南アジアの国々は、これまでお互いにダイレクトに見あうという経験がなく、それぞれ中国文明なり、インド文明なり、あるいはイスラム文明なりというものを通してしか、お互いに見つめあったことがなかった。そして今日では西欧という「窓」を通してお互いに価値判断するようになってきているのです。こうした点がわからずに、非常に親しい隣国である、歓迎されるということで、おそらく日本人のツーリストは東南アジアで安心して、それ以上の探索も何もせずに帰ってくるのが、今日の状態ではないかという気がするのです。

ですからいまままでお話ししましたことは、結局こういうことになってまいります。つまり日本人が、東南アジアという地域に入り込んで、経済的にも、あるいは人間接触においても、これだけの大きな関係を持ち出したのはごく最近のことです。あるいは近々この20年ぐらいのものでしょう。にもかかわらず、非常に長い植民地支配をし、あれだけ抵抗を受けた白人よりもきらわれるというのは、一体どこに原因があるのでしょうか。もちろんきらわれているばかりではないと思いますけれども、表面的にあらわれるところでああいう問題が現実起こっているという原因は、一体どこにあるのでしょうか。

その原因はいろいろ考えることができます。たとえば西欧人の場合には、非常に長期にわたる国際接触の積み重ねがあったこともあるでしょう。これは単に東南アジアとの接触ばかりではございません。ヨーロッパの中での接触もございましょう。それに対して日本という1つの非常にクローズドなソサイエティの中で、ある意味で独得のシステムをつくり上げてきた日本人が、国際的に適応する能力において非常に欠けているということが、もちろん1つ指摘できると思います。そうした日本人が急激にある種の異文化接触を強制される、あるいはせざるを得ない状態に置かれた。これはむしろ摩擦が起こるのがあたりまえであって、起こらないほうがふしぎだといういい方もできるし、ときには

全くホープレスになってしまって、しょうがないんだから、ともかくやるだけやって、起こるだけ起こってしまったほうが、あとスムーズにいくんじゃないかという気さえすることもあります。

たとえば別な考え方をしますと、国際人というか、国際的に出ていく人たちというのは、これがもし飛行機がない時代ならば、非常に限られた人たちであったということが言えると思います。それから出ていく人たちは、一般論としては、かなり文化的にも教養的にも素養の高い人々が出ていったはずでございます。けれども、今日の日本の、私はよくこれは「エグゾダス」ということばを使うんですが、あるいは「鎖を離れた日本人」といったほうがいいのかもかもしれませんけれども、突如として、爆発的に、社会階層の区別なく、いま世界中に日本人が飛び出して行っているわけです。まさに「エグゾダス」です。ですから極端にいうと、そういうトレーニングがほとんどない、あるいは全然考えもしなかったような人たちが、全く違うモチベーションで出かけてゆくと考えてもおかしくないわけです。

何も私は、インテレクチュアルだけにそういう慎み深く優秀な人がいるといっているわけではありませんけれども、一般論としては言えるだろうと思います。これはよく起こるツーリストの問題であり、あるいは本人は善意で全く悪気はなく、批難することはできませんけれども、たとえば「ノーキョウ」ということばで表現されるようなグループもあるでしょう。あるいはまた海外にかけた学生諸君でも、自分で知らないでおかしている過ちはいくらでもあります。つまり日本人のものさしは1つしかございませんから、自分のものさしに合うならば向こうでも合うはずだというふうに考え行動する人が非常に多いわけです。ところが、ものさしが違えば、全く違ったインプレッションで受けとめられることも、いくらでもございます。これは日本の企業がいま海外に出まして、とくに東南アジアへ出て、いろんな摩擦を起こしているのは、日本の企業におけるものさしが現地に通用しないということです。あるいはそれが唯一

のものさしであって、これこそが成功の基であるというふうに考えて行動してきたところに問題があったといってもいいかと思います。

私が前に書きました本では、決して日本人がすべてが悪気で行っているとは思っていない。むしろ善意の人たちはたくさんいるし、特に学生諸君がグループ・ツアーで出かけるような場合、決して悪意をもって行くわけはございません。ただ問題は、善意でいった場合でも、あるいは善意で行なった場合でも、結果的には全く悪意としてしか通用しない場合がいくらでもあるということ、私は本の中で書いたわけです。そしてこれがおそろしいのは、自分で善意だと思っている限りにおいて、それがどうとられているかにほとんど気がつかないということです。だからわれわれは、西欧をあれほど見てきた、勉強してきた能力をもって、なぜもっと東南アジアなら東南アジアというものを、異文化という目で見ることができないのだろうか。こういう問題に結局ぶつかってこななければならないと思います。

よく国際人というと、たとえば語学ができる、あるいはマナーが西欧的で上品であるとか、テーブルマナーがいいとか、いろんなことを個条書きにあげることをします。私はこれには必ずしも賛成ではないのです。というのは、言語も、マナーも、すべてこれは技術です。ことばはある種のインテンシブなレッスンをやれば、英語でも、ドイツ語でも、あるところまではしゃべれるようになるはずで、それからマナーも教えれば、そこまでは簡単にできるはずで、しかし、そうやって教わったマナーとは一体何でしょうか。全部西欧を標準にしたマナーです、西欧を標準にした英語なり、ドイツ語なり、フランス語にすぎないわけです。いまの日本の大学の教育システムはまさにそれです。だからその範囲ではできても、それ以上のことはできません。日本人にとって今日重要なことは、むしろ国際人になるために重要なことは、そういうテクノロジーの問題ではないように思われるのです。もっと基本的な、人間としてのインタレストにあるようでございます。もちろん私は語学が必要でないとか、マナ

一が悪くていいと申し上げているわけではありません。そうではなくて、こうしたことは重要かもしれないけれども、二次的なものだとしら上げたい。もっと大事なものがあるということです。

まず、われわれはヒューマン・ビーイング、すなわち人間だということ。次に人間としての共通のインタレストをもつという問題です。あるいは知的な好奇心の問題かもしれません。それがない限り、その地域での、その国での、その人々の、慣習なり感情を理解することは、まず最初からできないだろうと思います。そして教わったテクノロジーである西欧的なマナーだけが、唯一の切り札だと思っていれば、これはまさしく「イエロー・ヤンキー」になってしまうのです。アジア人ではないのです。黄色の顔をした、そして身振りややることとしゃべることだけが西欧化した「イエロー・ヤンキー」なのです。だから日本人がもし「イエロー・ヤンキー」といわれているとすれば、おそらくこうした点だろうと思います。

それから、それに付随して、よくわれわれは「エコノミック・アニマル」ということばで呼ばれています。この言葉は私にも疑問なので、日本人がむしろ日本人を「エコノミック・アニマル」と呼んでいるのではないかと思うことが非常に多いのですけれども、「エコノミック・アニマル」というのは、要するに働き過ぎるとか、せかせかしてしょうがないとか、余裕がないとかいう意味であるようです。これも事実でしょう。つまり、われわれにはものさしが1つしかありませんから、日本でのビヘイビア＝行動様式、企業におけるシステム、能率、全部を持ち出して、これが一番正しいと思っているわけです。そしてこれを持たなければ西欧とは競争できないと考えています。けれどもこのものさしは、東南アジアの現実では通用しない場合が非常にあるわけです。しかし、それを修正しようという考え方は、さっき申し上げた理由で、なかなか出てこないのです。

けれども、私をもっと間違っていると思うのは、エコノミック・アニマルの

意味が間違っているとされていると思うのは——もちろん修正して、現地と合わせるべき点もあるかもしれませんが——現地のインテレクチュアルは、決してわれわれが働き過ぎるといって批難することはないだろうという点です。むしろ日本人がエコノミックであるのは、日本人の関心が経済とか、テクノロジーとか、そういう面にだけ集中してしまって、それ以外のものが欠落したからではないかと、私は思っているのです。これは幾つもの例をあげることができます。ラオスという国は非常に仏教の信仰に厚い国であり、お寺もたくさんございます。着いて翌日の日曜、すぐにぼくは日本語を習っている学生たちに頼んで、一緒にお寺歩きをいたしました。けれども、そこに1年以上住んでいる日本人で、お寺にそれだけ関心を持って歩く人は、まずないということなのです。これは異常なことです。

前にぼくはラフカディオ・ハーンの話の本に書いたのですが、ラフカディオ・ハーンは日本にきて、日本の女と結婚して、子供をつくって、そして死んだのですが、彼の一生の仕事は何かといったら、おそらく当時まだ途上国である日本を、文明世界に伝えることだったろうと思います。しかし今日本人は、バンコクには5,000人いるそうですし、シンガポールでも2,000人もいます。インドネシアにも相当な数の人間が行っています。けれども、おそらくそうした文化的な、つまりインドネシアのフォークロア、あるいはインドネシアの宗教、あるいは民衆の生き方を、あるいは彼らの宗教感情を、われわれにハーンのような形で伝える人はほとんどいないのではないかと。つまりものすごく沢山の人が行っているにもかかわらず、そういう情報はわれわれに伝わってこないのです。そのかわり、伝わってくることもあります。つまり安いショッピングだとか、お遊び的なことはいくらでも入ってきます。これはどういうことだろうか、結局は日本人の文化次元が低いということです。レベルとして、総体としての日本人の教養なり文化次元が非常に低いということです。そしてエコノミックな側面あるいはテクノロジーだけに関心があり、それ以外にはほとんど関心が

ないということです。だからよくいわれることは、日本人が向こうでパーティをやって集まると、すぐ商売の話になってしまう、それ以外の話はないのかといわれます。皆さんの中にも、おそらく商社なりその他で海外に出る方が、数年後には出てくるのではないかと思いますが、同じような経験をされるかもしれません。

ほとんどの人は、その国の歴史など読もうともしません。宗教を理解しようとしません。文化を知ろうともしません。だからことばを習おうともしないのです。むだだと思っているわけです。必要ないと思っているのです。自分の国より技術的に劣っている、経済発展で劣っている国のものを、何で学ぶ必要があるかと思っているわけです。学ぶなら自分より進んでいる国から学ぼうとこれは根強く、日本人の心の中ばかりではなくて、社会システムにも根づいた信念です。困ったことです。たとえば、言いにくいことですが、若しある人がどこかに派遣されることになって、ロンドンへ行くかジャカルタへ行くかときかれたら、まず99%がロンドンへ行くと答えるでしょう。留学生にしても同じだと思います。また教師が、タイのチュラロンコン大学へ行くか、あるいはコロンビア大学へ行くかときかれたら、まずは99%が、初めてならばコロンビアへ行くと思います。私はなにもそれを批難しているわけではありません。批難しているのではなくて、こうしたことが積み重ねられて一つの社会システムとなり、企業なら企業、官庁なら官庁、学者なら学者という社会で、妙なバリエーションを持っていることを云っているのです。

私、こんなことを言うのは、自分の大学の恥になるか、自分の恥になるか知りませんが、ごく最近の、ごくごく身近い例を申し上げます。去年の春ごろでしたでしょうか、早稲田大学がモスクワ大学と提携をいたしておりますが、それが5年間延長になるというので、交換教授として行く希望者がいないかという話がありました。そこで私はモスクワ大学へ行きたいという希望を出しました。ちょうどそれとほとんど時期を同じくして、韓国の高麗大学と早稲田

が新たに提携を結びました。そこに行く人がいないかと又募集がありました。私はこれにも応募してみました。この頃御承知のように日本では、途上国問題というのはわれわれの間でも非常に大きな問題となっており、これからは学者もヨーロッパばかりではなくて、途上国を勉強しなければいけないということがよく云われておりました。何も早稲田ばかりではありません。ほかの大学でもそうです。ところがそれから1ヵ月ほどして、この募集を扱っている大学の外事課へ電話して聞いてみましたら、「いや、モスクワ大学は非常に希望者が多いからたいへんなようですよ」ということでした。「それでは高麗大学のほうはどうでしょう」と聞くと、「ちょっと待ってください、ああ、希望者は先生お1人です」という返事です。要するに人のことは言えないのです。ぼくは妙にえこじなところがありまして、それなら私は高麗へ行くということにしたのです。しかしこうした状態をぼくは批難することができないのです。もし私が、同じ立場で初めて外国へ行くのなら、きっとヨーロッパへ行くでしょう。私もそうでした。私は一番先にハーバードへ行きましたし、2度目はノースウェスタン大学へ行きました。そういうことがあるから、その後マラヤ大学へ行こうと高麗大学へ行こうといいんだという考え方になるかもしれません。だから私もひきょうだといえるかもしれません。

けれども、問題があるのは、西欧で学んだ人が、では1年なり2年を途上国に身を投じて、何らかの仕事なりサービスをする気があるのかということ、これまたいないのです。そうするとやはり問題が出てくると私は思います。だから私も、国際交流とか、人事交流のことはある程度知っておりますが、途上国のために働こうというよい人がいないのです。行く人がいないといったほうが正しいかもしれません。しかも重要なことは、途上国は非常にプライドも高いし、インテリも多いのです。私がマラヤ大学へ行きますと、日本の仲間が、「マラヤ大学というのはどの程度の大学かね」などと聞きます。ところがマラヤ大学のスタッフは、まず間違いなくほとんどがオックスフォード、ケンブリッジ、ア

メリカだとハーバードか、あるいはせいぜい U. C. L. A かスタンフォードを出ている。しかも、最低5年以上は勉強しています。長いものになると10年くらいにもなり、英語でどんどん国際的な学会で発表をしています。日本のわれわれの仲間よりも、そのキャリアははるかに高いのです。しかしそれがわかっていないから、「どの程度の大学だね」と聞くわけです。そういうところへ何も知らずに行くから、逆に恥をかくことになるのです。

ぼくはイギリスの植民地支配についてここで問題にしようとは思いませんけれども、イギリスがほかの国よりもすぐれていたと思うのは、やはり派遣された人たちが非常に優秀だったこと、これは非常に感じます。またどうしてかよくわかりませんが、イギリスの植民地には、混血がほとんどいないのです。いないといったほうがいいと思います。ところが、オランダとか、フランスの場合には非常に多いのです。これはやっぱり社会システムの反映ではないかという気がします。それから、オランダでもそうですけれども、イギリスには非常に研究者が多く、そういう仕事で行った人が本を書いたり、研究書を出している例がたくさんございます。特に古い時代には、めったに人が行かなかった時期ですから、いまになると非常に貴重な研究になります。

いま、われわれは東南アジアと接触を深めようと言っていますが、多くの人たちは国内で言うだけで、自分にかかわる問題でないところで言うのではないかという気がするのです。

皆さんでも同じ問題にぶつかることがあると思います。たとえば会社へ入って、今度はどこへ派遣されるかというときに、チョイスがあったら考えるでしょう。あるいはあなたが考えなくても奥さんが考えるかもしれない。これはいわば社会のシステムなのです。そんなところへ行ってどうするのか、子供の教育はどうなるのかと言われたらやっぱり困るでしょう。しかし、こういう問題は、「国際社会における日本人」がこれからどうあるべきかということを考えるときに、乗り越えていかなければならない問題だと思うのです。そしてそれ

は決して政府を批難したり、企業を批難したり、ツーリストがだらしがないとか、おかしいとか言っているだけではすまない問題なのです。極端に言えば、われわれが持っている、われわれが生きている、われわれがつくり出した、大学教育を含めての社会システムが、そういう傾向を持っているということなのです。これを徐々に変えていく以外には、やっぱりほんとうの交流はできないという気がいたします。

日本の社会システムの問題について私はいろいろ考えますが、日本の社会システムが悪いとは、私は必ずしも思っていません。日本の社会システムというのは、非常に特色のある、ある意味で優れたものだったと思います。しかしこれはおそろしいほど日本的なシステムで、海外で通用するものではないということも忘れてはなりません。したがって、日本の近代化という問題を考える場合にも、この日本の社会システムが前提となっているのです。つまり、日本の近代化は、こうした日本のシステムにそのまま依存しながらここまで来たといえるのです。この点はある意味でぼくは幸いだったと思うのです。というのは、もし日本の文化がもっと低ければもっと根底から西欧化したと思います。つまり、自分自身のものがなくなるのです。ですから文化の受容というのは、いろんなプロセスがありますが、自己の文化がある程度高いときには、それを維持しながら技術を入れ、それによってアジャストしていくのです。日本の場合などその雄たるものでしょう。だから日本人は、戦後、若い人は非常に西欧化したと云われますけれども、おそらくそのスタイルと中身とでは相当違うのではないのでしょうか。おそらく年齢がたてば、またもとに戻ってくるのではないかとぼくは思います。私自身もそうですから。

これはいいことであるのですが、ただ問題となるのは、今日ではそれを、早急に国際的なスタンダードに合わせていく必要がある、と同時にまた、自分の持っているよさというものを維持してゆかなければならないということです。特に東南アジアでわれわれが仕事をするときには、われわれはアジア人という

メリットを持っています。このメリットはさっきは劣等感につながると言いましたけれども、西欧人が逆に全く持たない、東南アジアへくればかれらが逆に劣等感を持つであろうようなメリットでもあるのです。ですからわれわれにとって、たとえば東南アジアの中で国際人となる方法というのは、西欧人のまねをすることではなくて——まねするところもたくさんあると思いますが、——日本人としての新しい方法をさがしていかなければならないのではないかと、実は思っているわけです。それができないことには、いつまでたっても今日と同じ過ちの繰り返しをするような気がしてならないのです。

そのためには、たとえばどんなことが考えられるでしょうか。私がこのごろ考えているのは、明治以来日本人は「脱亜」ということを目標としてきました。アジアから抜け出すことが国家の発展だと考えてきました。そして今日ではおそらくその90%ぐらい成功したのではないかと思います。しかしそのために、われわれはまた相当な犠牲を払ってきたと思うのです。たとえば明治時代に、われわれはあっさり宗教も捨てました。それ以外の日本的なものは、可能な限り、重荷になるというので捨てたのです。捨てれば速かな技術導入が可能だったからです。つまらないものを捨てて身軽になれるからです。逆に発展途上国の場合には、近代化が進まないのは、そういう重荷をいまだにしょい込み過ぎてるからだという議論ももちろんあります。インドのカースト制の問題とかあるいは宗教的な、いろいろな伝統的慣習の問題があります。けれども今日の日本は、新聞なりジャーナリズムが騒いでいるように、逆にあまりにも機械的で、エコノミック・アニマル的になってしまったのです。何のことはない、われわれが明治時代に捨てたものが、いま必要になってきたという気がするのです。つまり追いつくのは非常に早かったけれども、追いついたとたん、そのために非常に大きな犠牲を払ったことに気がつきました。その犠牲とは、日本人の心の問題なのです。

いろんなことを、まともにもなく話をしてきましたが、では日本人はこれか

らどうしたらよいのかという結論は、容易に見つけることはできないと思います。この問題は、おそらく日本人の1人1人が、それぞれの置かれた環境の中で考えていく以外にないでしょう。今日の日本では、平等という理念が非常に強く打ち出されて、ものすごい平等社会ができ上がってきたという気がいたします。今日の西欧においてすら、まして東南アジア諸国では、平等社会どころか、たいへんな階層社会が存在しています。そういうところに日本人が入っていった国際的な活動をするためには、多面的なインテリジェンスというものを持たなければやっていけないと思います。もし理想的な日本人としての国際的なビヘイビアというものがあるとすれば、それは西欧へ行って立派につき合っただけのビヘイビアをもつと同時に、しかも東南アジアへ行っても、そこでまた十分立派にやっただけのビヘイビアをもつ日本人でなければならないということだと思います。

これは西欧の模倣だけではできないということです。その場合、こうしたビヘイビアの根本を何に求めるかということ、日本人としての資質、日本人としてのよさ、あるいは日本文化を正当に受けついで、日本人としてのビヘイビアを持つ以外にないということなのです。もし西欧化しか方法がないならば、われわれは西欧人になりきる以外に方法がないでしょう。しかしそれはおそらく不可能ですし、また西欧人の亜流以上にはなれません。だからわれわれとしては、早く日本人としての国際的なアプローチの方法をさがさなければならないのですが、それは基本的には、個人個人が自分の努力の中で、インテリジェンスを通じて見出していく問題ではないかと考えているわけです。

東南アジアは日本とは同じ社会ではないし、最初に申しましたように、非常に異なった社会でございます。それなら東南アジアが非常におくれているかということ、決してそうではありません。ですからわれわれは、それぞれの国なり民族がもつ文化を正当に評価する鋭い目と高いインテリジェンスを持つこと、これ以外に、国際社会人の条件というものはないと考えるのです。